

高知県室戸市池山池湿地周辺における最終氷期後期以降の植生史

○三宅 尚・井上麻衣子・石川慎吾（高知大・理・自然環境）

室戸市奥郷池山池湿地（北緯 33 度 20 分 46 秒，東経 134 度 9 分 14 秒，海拔約 520 m）で採取された堆積物試料の花粉分析と炭化片分析を行い，当地域の最終氷期最盛期以降の植生と火災攪乱の変遷を調べた．花粉・胞子の組成と出現率の垂直変化に基づき，IKE-I から IKE-III 帯までの 3 つの局地花粉帯に区分し，さらに IKE-I 帯を a と b の 2 つの亜帯に細分した．各花粉帯の下限の年代は狭在する鬼界-アカホヤ火山灰の噴出年代と 4 つの有機物試料の ^{14}C 年代に基づき算出した．なお，IKE-Ia 帯の年代は ^{14}C 年代から判断して 26,000 yrs B.P.頃と推定され，少なくとも最終氷期後期に対比されることはほぼ間違いないが，今後，詳細な検討が必要である．花粉分析結果から推定される各花粉帯の植生は次に示す通りである．

IKE-Ia 帯と IKE-Ib 帯（約 12,000?—9,000 yrs B.P.）には，モミ属，ツガ，スギが優勢で，ブナ，コナラ属コナラ亜属，クマシデ属などの混生する温帯針広混交林が成立していた．IKE-Ia 帯では草本花粉の占める割合が 68—82%と高いことから，IKE-Ib 帯と比較すると樹木の発達程度が悪く，イネ科，カヤツリグサ科などを含む草原も分布していたと考えられる．Tsukada (1986)は，現在のスギ林分布域の気候環境に基づき，室戸岬先端の氷期の沿岸低地を可能性のあるスギの逃避地の一つとした．最終氷期後期に対比される IKE-Ia 帯でのスギ花粉の多産（7.6—24.2%）から，この仮説を支持する可能性が出てきた．IKE-II 帯（約 9,000—3,800 yrs B.P.）には，モミ属，ツガ，ブナなどが衰退する一方，コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布を拡大した．IKE-III 帯（約 3,800 yrs B.P.—ほぼ現在）には，コナラ属アカガシ亜属の優勢な照葉樹林が衰退し，スギ林に移行した．このカシ林からスギ林への移行は現在，湿地周辺に分布するスギの植林に起因する可能性があるが， ^{14}C 年代から推定される IKE-III 帯下限の年代はその植林開始年代としては整合性を欠く．湿地内の他の地点で採取した堆積物試料の IKE-III 帯に対比される層準では，スギ花粉とともにスギと考えられる材化石が多量に産出したため，現在，それらの樹種同定と年代測定を行っている．

炭化片分析の結果，IKE-II 帯中部では炭化片沈積量（4.7—15.9 $\text{mm}^2/\text{cm}^2/\text{yr}$ ）が多いことから，湿地周辺で火災が頻発したと推察される．その前後ではいずれの層準でも炭化片沈積量は 1.4 $\text{mm}^2/\text{cm}^2/\text{yr}$ を下回っており，火災は低頻度で規模も小さかったと考えられる．完新世初頭以降の火災の急増は日本各地で広く存在した可能性があるため，その成因や攪乱体制の時空間的解析が今後強く望まれる．